

言葉と人間関係

——テレビドラマによる分析——

栗 山 昌 子

1. はじめに

日本語能力が上級レベルに達しており、生活上のコミュニケーションには全く支障がない外国人留学生の中には、どうしても日本人の中にすんなり入っていき、ある種の壁を感じている者は少なくない。通常的生活では何不自由ないが、人間関係の上でうまくいかない、一歩中へ踏み込めない焦燥感を感じるということをよく聞く。家族や自国の親しい友人から離れていれば、日本でそれに代わるような友人や家族を望むのは当然である。特に、10代後半から20代の青春期には自己の悩みを互いに話し合い、助け合える真の友人が必要な時期である。勿論同国人の友人は多くいるとしても、留学先の国で得る真の友というものは留學生活にとってかけがえのないものであり、留學の目的の一つでもあると言える。留學生は留學先の大学で學問を學ぶという目的と同じく、その国の友人を作るとすることも切実に望んでいる。まだ日本語を習い始めた初級レベルの時期は日本語を習得することに一生懸命である。日本語が上達すれば日本人の友達もでき、さまざまな問題も相談できて、精神的にも安定した生活が送れるだろうという期待のもとに学習に励む。そして、彼らがある程度流暢に日本語を話せるようになった時にぶつかる壁というものは、ほとんどは異文化摩擦の問題として取り上げられることが多い。しかし、彼らの問題は言葉の問題とは全く切り離して考えられるものでもない。なぜならば、かなり流暢に日本語を話す外国人留学生から実際に耳にする言葉は、「外国人にとって日本人の気持ちになって話すのが難しい」「日本語には言って良い言葉と、言っていけない言葉があるらしい」「日本人は言葉だけだ」「言葉の真意が分からない」など言葉に関する問題が多い

からである。ということは、言葉が深く関わっているということでもあり、言葉の問題を除外視することはできないと言える。そこで具体的にどういう状況でどういう言葉が発せられた時に学習者が戸惑うのであろうかということをもとに考えてみたい。

日本語能力が上級レベルであるという判断は、何によってなされるのかは難しい問題であるが、最近では、発音や文法的な正確さや語彙の的確さよりも、むしろコミュニケーション能力が重視されるようになった。コミュニケーション能力の中で、相手と状況によって変わる言葉の流動性をいかに正確に掴むかということも大切であるが、その言語に表わされた意味の背後にある気持ちというものを掴むことは更に難しい。自分の真意を言葉に表わすことにいかに誠実であっても、流動的な場面と相手によってはその方法を誤ると思わぬ誤解を招く場合がある。また、相手の言葉に対する応答が適切でない場合には、意に反して相手の気持ちを逆上させたりする場合さえもある。日本語能力試験1級合格者で日本語の新聞が読め、大学の講義内容を理解する能力を備えていても、現実の社会で人間関係上のコミュニケーション技術が十分であるとは言えない。日本語にいかに適切に対処できるかということは日本人同士でさえも困難な場合がある。まして、外国人にとってはかなり難しい問題であるのは当然であろう。しかも、言葉の背後にある真意は何であるか等については、教科書には全く記載されていないのであるから、個々のケースに応じて独自で対応しなければならないということになる。

本論では、誤解を招きやすい点に関して、まず筆者がインタビューで得た資料および具体的ないくつかのケースを取り上げて分析する。次に現代若者の生活を背景にしたテレビドラマを取り上げ、いわゆる上級レベルに達している外国人で、将来日本社会で活躍しようと志している留学生が円滑なコミュニケーションと人間関係を持続するための方策を探る。今後日本語教育の現場での指導の指針にできれば幸いである。

人間関係の持続に障害となっている異文化間の摩擦は、往々にして欧米系の文化と比較されがちであるが、今回の事例は日本で最多を占めるアジアからの留学生、特に中国人と韓国人留学生の例から推察したものである。^{#1}

2. 事例

2-1 「日本人は言葉だけ」なのか（韓国人留学生A）

初め日本人はとても優しいと思っていた。一緒に食事をする時、何を食べていいのか聞いても何が食べたいのかなかなか言わない。「何をたべようか」と言うと、「何でもいいです」と言う。「じゃあ、私が決める」と、たいてい自分が決めていた。しかし、こういうことは食べることだけではなく、全てにおいてそうだと思う。相手の気持ちを尊重して自分の気持ちをあまり言わない。私は日本人のそういう心遣いはとてもいいと思う。

だけど分かりにくい。いつも本当はどうなのかな、本当に何でもいいのかな、と思うようになった。実は、最近とても困ったことが起こった。日本人の友達とはよく私の国の話をする。どんな国かとか、どんな食べ物がおいしいとか、いろいろと話すうちに、いつも私の国に行ってみたいと言っていたから「私は夏休みに国へ帰るから一緒に行く？」と聞いたら「うん、行きたい」と言った。「私の家に泊まっていいし、そうしたらホテル代もいらぬし」「ああ、それはいいね」「じゃあ、そうしよう」ということで旅行会社に切符の予約もして、国の両親や友達にもそのことを話して準備していたら、「行くつもりはなかった」ってことになって、これには大変ショックだった。私は友達が当然行くと思っていたのに、言葉だけだったのかなと実感した。自分の国では「行きたくない」と思ったらそんな話はしない。

母語話者と間違えられるぐらい流暢に日本語を話すAであるが、最初は日本人の「何でもいい」と言う言葉に控えめで優しさを感じていた。「あなたの良いものでいい」と言うことは相手の気持ちを尊重していることになり、自分を相手に合わせるという心遣いの優しさを感じていた。しかし、「行きたい？」と聞いたAに対し、「うん」と言った日本人は相手に合わせるだけの言葉であったことにAは気づき、本心が言葉に表されていないと「日本人は言葉だけ」つまり、言葉に真意がないと感じている。

これに近いことは日本人間でも起り得ることである。日本人同士の場合はどうであろうか。最初は同調して「はい」と言っていたが、だんだん具体的になってくると断りづらくなり、つい自分を殺して「まあ、いいか」と相手

に吞まれてしまうケース、そうでなければ最後に断って相手を怒らせてしまう。しかし、そういう場合でも相手が寛容な人ならば、「私が強引で悪かった」とか「気を使わなくてもよかったのに、最初からそうならそう言えばよかったのに」と許してくれることもある。「断りそびれる」「言いそびれる」と言う言葉があるように、日本人には断ることが不得手である。

2-2 「いいえ」と言っではいけないのか (中国人留学生B)

「No といえない日本人」と言われる通り、日本人にとっては「はい」と言うことの方が「いいえ」ということよりはるかに楽なのである。「和をもって尊しとする」という古来からの教えに従って、お互いに仲良くするためには同じ意見をもっている、ということがよしとされる社会なのである。アルバイト先で2人の上司から同時に2つの仕事をそれぞれに頼まれ、それは不可能であることを言ったら次の日から「もう来なくてもいい」と言われた外国人留学生Bに対して、日本人の学生は次のように助言している。上司が無理なことを言ってもアルバイトは「できません」と言うことはできない。日本の社会では、まずそういうことは通用しない。殆どのケースは、両方それぞれに「はい、分かりました」と返事をしておいて、実際にできることだけをやるというのである。日本人は一般に上司に対してははっきり「いいえ、できません」と最初から拒否することはしない。また、相手にとってもそういう返答は考えられないことである。

このアルバイトの例のように、反対をすることを嫌う日本人は、その場では同調してこれから続くであろうところの人間関係を先行させるのである。特に上下関係の場合は当然のこととしている。しかし、これは外国人にとっては虚偽の言葉としてとられ、「はい」はうわべだけの言葉として不誠実を意味することになる。

2-3 「口答え」とはどういうことなのか (日本人学生C)

上記のケースで、Bが「2人の上司それぞれに一度に2つのことを頼まれてもそんなにできるわけがありません。」または「一度に2つのことはできません。」と事実を述べた場合、そういう返答は「口答え」としてとられ、上司

に反抗したということになる。その後上司に「どうして私が言ったことをやらなかったのか」と問われた場合、まずは「すみませんでした」と謝り、「先に頼まれたことをやっていたから、今から直ぐやります」と言う方がよいというのが日本人学生の助言である。日本人学生はまだ20代そこそこだが、こういう人間関係の方策を巧みに身に付けているのである。

2-4 「すみません」「～でもいい？」 気の遣い過ぎでは(韓国人留学生D)

文化の違いもあるかもしれないが、「日本人の迷惑かけたくないという気持ちは分かる。しかし、それが人間関係に壁を作っているのではないか」というのが韓国人留学生Dの意見である。隣の人に話しかけようかなと思っても日本人の社会では「迷惑かな」と思う気持ちが働いてつい遠慮してしまう。また、話していてもこれ以上聞いたら悪いと思って結局うわべだけの話になってしまう。親友に対しても常に気を使って、鉛筆や消しゴムを借りる時でも、「借りてもいい？」と必ず許可を得る。韓国では、親友の物ならば、消しゴムを黙って使っても気にしない。

同じような例が、異文化間コミュニケーションでのトラブルとしてあげられている。次の事例は、八代京子他(1998)「異文化トレーニング」に誤解やトラブルが発生した時の解決や未然防止に役立つ「DIE法実践練習」^{#2}の1例として示されていたものである。

アメリカの大学院に留学中のさなえさんは、その学期、学生寮で韓国人の留学生のキムさんと同室になった。その寮は大学院専用で二人部屋なのだ。部屋には小さな冷蔵庫も一つ備え付けになっていた。二人で共同で使うようになっている。さなえさんとキムさんも、飲み物やちょっとした食べ物をいつも入れていた。共同といっても、お金を出し合って一緒に購入するわけではない。それぞれ自分で買ったものをしまっていた。ある日さなえさんは他の日本人留学生にこんなことをもらした。「同質のキムさんが時々勝手に私の牛乳などを飲んでしまう。自他のものを区別できない人と同室になってしまって困っている。注意するにも何となく角が立ちそうで。全く気分が悪い」。それを聞いた友人も、キムさん

の常識のなさを批判した。しかし結局さなえさんは何も言い出せず、その学期は何となく気まずいままその部屋で過ごし、次の学期は他の理由をつけて部屋替えをしてもらった。

上記の事例に関して、日韓問題を研究する韓国人、オ・ソンファさんが新聞のインタビューに答えて語ったコメントの紹介がある。^{註3}

韓国人を家に招いたら、初めて遊びに来たにもかかわらず、冷蔵庫を勝手に開けたり、物を取って食べたりする。日本人はそれだけはやめてほしい、と言う。しかし、韓国人に言わせれば、そうしない方がむしろおかしいんですね。私はあなたにこんなにもオープンなんですよ、距離感がないんですよという表現なんです。

中国人学生Eも同様なことを作文で指摘しており、日本のテレビで娘が母親に「有難う」というのを聞いて違和感を感じている。

中国では親しければ親しいほどお礼を言わない。水臭いと感じるからである。例えば中国で放送された日本のテレビドラマの中で、母親が娘を風呂に入れて洗うと、娘が「有難う」と言った。それを見た中国人は「うそだろう」と言って、皆驚いた。家族間では「有難う」とは絶対に言わないからである。(Eの作文から原文のまま)

また、Eは日本人が度々「すみません」と言うのを聞いて、中国人との謝り方の違いについて実際にあった例をあげ、次のように述べている。

中国人は、なかなか謝らないということである。これも多くの日本人が経験している。中国に留学したある日本人の話である。その日本人の宿舎は大学構内にある外国人専用ホテルである。大学ホールでの映画上映会が終わって、午後9時に戻ると戸が閉まって開かない。30分ほど戸を叩いたが、誰も開けない。ホテルのフロントにスタッフがいないかならない筈である。10時頃中国人の教授の宿舎まで行き、助けを求めた。

教授も一緒になって開けようとするが、戸は開かない。ついに学長まで起こして、一緒になって戸を叩いた。寝ていたスタッフがやっと出てきた。スタッフは学長たちに弁解ばかりして彼には一言も「すみません」とは言わなかった。

学長たちには「すみません」と2度繰り返した。中国人はめったに「すみません」とは言わないと思った。

日本では迷惑をかけたと思えば、とりあえず謝る習慣がある。その後で少し弁解をする。中国では、まずなぜ自分がそうしたかを先に言い、相手と議論する。互いの誤解があればそこで解決できる。自分が非を認めて、謝るのはそれからである。日本人にはそれが言い逃れに聞こえたり、ふてぶてしく見える。(原文のまま)

2-5 「私は歴史が得意です」 中国人留学生F

日本人は人前で身内を褒めない、まして自分のことに関しては「私はテニスが上手」だとか、「数学がよくできる」とかは決して言わない。Fは上級レベルの日本語力を持つ学生であるが、口頭発表の際に「私は中国の歴史が得意ですから、中国の歴史について話します」と始めた。自分に属する者、特に夫や妻、子供のことを褒めることは(最近はよく聞くこともあるが)、一般的にはよしとされていない。相手に対して自分や身内を高く評価しないということは謙譲の精神に繋がる。自分を低くすることによって、相手を高め、安心させ人間関係を維持するという気遣いを含む日本語独特のコミュニケーション方法である。

また、相手が自分を卑下したり、自分の持ち物についてマイナスイメージのことを言った場合には、「いや、そんなことはないですよ」という返答をするのが普通である。しかし、外国人の中にはその言葉が卑下ではなく、明らかに真実だと思う場合は、「そんなことはない」と事実を否定することは自分の意に反しているとして疑問を感じる者は多い。ではどういう応答をすれば自分の真意も伝えられ、人間関係にも支障をきたさないかという返答の仕方はなかなか思いつかないだろう。

家の新築祝いに留学生を招待した日本人が、家の中を見せてまわって二階

の間に連れていった時「二階はちょっと狭いんですよ」と言ったら、「そうですね」と応答され、その返答にいささか違和感を感じた、という話を聞いたことがある。日本人ならたとえそう思っているとしても、「そんなことはないですよ」という返事を返すだろう。日本人は相手から気休めの言葉を期待しているのだろうか。それとも予め自分を低めておいて相手から「そうではない」と否定されることによって自分が同等又は高められることを期待しているのだろうか。謙譲を美德としている日本人を相手には、それが真実のことなのか謙遜なのか、確かに分りにくく混乱を招く返答である。

他人について面と向って褒めることが日常的に行われる西洋社会と違って、自分を卑下することにはたけていても大っぴらに人を褒めない傾向にある日本人は、褒めることも不得手だし、褒められることにも慣れていない。褒められると返答に困り、とんちんかんな応答をしてしまう。「いや、全然駄目です」とか、持ち物を褒められた場合などは「いや、安物ですよ」「デパートのバーゲンで買ったんです」と褒め言葉をまともに受けずにマイナス面の表現をしたり、関係のない別の事情を述べて言い訳をする。これは前述の、自分の物を謙遜した場合「そうでもない」とそれを否定する言葉を期待する心情の裏返しともとれる。日本人男性が部屋に入ってきた時外国人英語教師がネクタイを褒めた。日本人男性は突然自分のネクタイを褒められて返答に困り「えっ、あのう、すみません」と答え恥ずかしそうに出て行った場面を筆者は今でも覚えている。予期していなかったとは言え、褒め言葉に慣れていない男性が適当な応答表現が思いつかず、言葉に詰まって「すみません」で応じたのは当然かもしれない。この場合「ありがとう」と一こと言えばよかったのだが、褒められたことをそのまま受け入れることのできない日本文化に育った者としては、「ありがとう」という言葉こそその場には違和感を感じる言葉なのかもしれない。日本語の教科書には「日本語がお上手ですね」に対して「いや、まだまだです」と上手にかわす否定的な返答が一般に示されているだけである。

相手を褒める、それは一種の評価であるが、これは特に、上司や目上の人と面と向かってはやらないようである。「教授は実力がありませんね」と言って周囲の日本人の友人たちに変な顔をされたが「なぜですか」と問うた留学生

がいた。「先生の教え方が上手なので、私の日本語が上達しました」よりも「お陰さまで」の方がより日本語として自然な表現である。日本語の「褒め」は一般に目下の者を励ましたり、慰めたりする場合になされるようである。

2-6 褒めに関する特殊な例

面と向かって褒めること、また、褒められることに慣れていない日本人は、褒めの場面で異様に神経を使ったりする場合がある。八代京子他（1998）は褒めの背後の意味を誤解して摩擦を起こしている例を述べている。^{#4}

例1：

木村さんが庭の手入れをしていた時のことです。お隣の吉田さんの垣根からキンモクセイの香りがしていました。ちょうど垣根越しに庭の掃除をしていた奥さんに「このキンモクセイはいつも良い香りがしますね」と声をかけました。ところが数日すると吉田さんの庭のキンモクセイの枝がぼっさりと切られていました。木村さんはあんなこと言わなければよかったと後悔しました。

木村さんはキンモクセイの香りを褒めたつもりが、吉田さんにとっては、「キンモクセイの香りが鼻につく」と解釈されたのである。この例は極端な事例のように思えるかもしれないが、直塚玲子「欧米人が沈黙するとき」（1980）にはA夫人宅の夜遅くまで響くピアノの音が近所の迷惑だということを言いくいと感じた近所に住むB夫人が、A夫人に直接苦情を述べることをせずに、褒め言葉に包んでほのめかした例が記載されている。^{#5}

直塚は、夫人同士の会話について、外国人（欧米人）の被験者に「あなたはA夫人が苦情を述べていることに気がつきましたか」という設問をしたが回答者の半数以上の56%が、A夫人の苦情に気づいていないという結果を得ている。従って外国人には日本的婉曲表現は通じないとしている。

自分や自分の所有物を褒められることに慣れていない日本人にとって、褒められることに関して気を回しすぎる場合も生じる。気を使うことについては、気を回す、勘ぐるなど言う言葉があるように、日本語には言葉の背後に

ある意味を先回りして理解しようとする傾向がある。上記例1のキンモクセイの例は極端な例かもしれないが、婉曲にもの言うことをよしとする日本人同士の場合でも誤解が生じることもある。

3. 日本人のコミュニケーションと人間関係

日本語のコミュニケーションの特徴はよく螺旋的^{#6}だといわれる。自分の主張や意見を明確に言語化しないで、相手にいろいろと状況説明を加えながら気持ちを伝え、相手が結論を推察してくれることを期待する表現方法であり、最後まで結論を言わずに察しを期待する。螺旋的なスタイルでは、例えば、相手からの誘いに対して「残念ですが、用事があって駄目なんです」と直接的に断ることをしないで、「いいですね、是非そうしたいんですが……」と結論を言わずに、相手に託し、「では、駄目なんだ」ということを察してもらう。相手に自分の状況を預けて判断を委ねるのである。これには相手が誘ってくれた好意に対する感謝の気持ちと、しかしその意にそぐわないことを残念に思っているをことを理解して欲しいという、相手の共感を共有することを期待している。

金田一春彦（2001）は、日本語に現れる日本人の性質を「はっきり言わない」「ぼかした言い方をする」「言葉の省略が多い」^{#7}と述べている。

全てのことを言葉ではっきり言い表さなければ意思の疎通ができない文化に比べて、状況で理解される部分は言語化されずともよい日本人のコミュニケーションでは、話し手の必要最低限の言葉でもって聞き手がその本意を推察するわけであるが、そこには同じ価値観同じ行動様式を基盤としている人間関係が重要な部分を占めているのである。日本語には言葉の中に相手の心情に対する心配りや人間関係が含まれてしまっている表現が多い。例えば、「その申し込み用紙は自分で書いたのですか」という質問に日本語初級の外国人留学生はよく「いいえ、事務所の人が書きました」と答える。しかし、日本人ならば、「いいえ、事務所の人に書いてもらいました」または「事務所の人が書いてくれました」と答えるに違いない。「書いた」という動詞は「書いてくれた」ということによって話し手がありがたく思っているという気持ち

が含まれている。「花瓶の中に花がある」というのではなく「花が生けてある」という言葉の中にも誰かが何かの目的のために生けたという気持ち含まれているとも言える。このように日本語には人間関係が背後に暗に示されているものが多く、これらの表現は外国人学習者にとっては習得しにくい点である。日本語の教科書の中で教えにくい項目、つまり学習者にとって習得しにくい項目のほとんどは授受表現を含めて人間関係や状況判断を伴うムードに関するものであると言ってもよい。

人間関係が組み込まれているものの著しい例は敬語である。敬語は年齢、社会的地位などの上下関係とそれに加えて、場面性も関与している。日本語学習者の到達目標の中で敬語が上手に使えるようになりたいという希望が最も多いが、敬語を上手に使うということは、単に尊敬語、謙譲語などの敬語の形態を完全に習得することだけでなく、相手と自分との関係や親密度、及びおかれた状況を十分に察知しているということである。

敬語を含めて、相手との人間関係や心配りが大いに関与している日本語を自由に使えるようになり、日本社会で円滑な人間関係を築いていくのが上級レベルの日本語学習者の目標である。このような日本語は実際の現場で体験しながら学びとっていくのが一番良い方法であるが、それには時間もかかり、度重なる失敗も経験することになる。しかし効果的な学習方法として、実際の言語活動をテレビドラマという資料をもとに観察することができる。なぜならテレビドラマではさまざまな属性を持つ日本人が自分のおかれた状況や相手との人間関係の中で、どのようなコミュニケーションを行っているかということが具体的に示されているからである。

4. 現代の若者の言葉と人間関係の意識

4-1 資料としてのテレビドラマ

服装や言語行動、行動様式において特徴的な現代の日本人若者、つまり外国人留学生たちが実際に交わっている日本人学生たちはこれまで述べてきた日本語の特徴をどのように取り入れているのであろうか。日本人の伝統的な共通基盤を全く無視したような言動や生活様式を持つ者たちにとって、日本

文化思想を背景に持ついわゆる日本語らしさは変革をきたしているのだろうか。実際のコミュニケーションの場面で若者たちは日本語の特徴をどのように保持しているのだろうか。若者向けのテレビドラマを題材にして若者のコミュニケーションの実際を考察してみる。

資料 NHK テレビドラマシリーズ 「恋セヨ乙女」

放送期間 1週間4回×5回 20回 2002年7月～8月

構成 1週間に4回で1話が完成する

主な登場人物 主人公 幸子，父親，妹，親友の奈々子，比奈子
それぞれの話の中に出てくる相手の男性4名 会社の同僚3名

ストーリー

主人公の幸子は独身で食品開発会社に勤めるかたわら毎朝出勤前に父親のおにぎり屋を手伝っている。趣味は食べ歩きである。毎晩勤めから帰ると親友の奈々子と比奈子と3人でお酒を飲みながらお喋りするのが日課になっている。3人は高校時代バスケット部で、現在看護婦の奈々子はキャプテンであった。比奈子は後輩で主婦である。話題はたいてい男の話、幸子は恋人がほしい。シリーズ毎に幸子の恋人が現れるが、失恋に終わる。父親はそういう娘の男性関係が気になり、3人の話を聞き耳立てて一喜一憂している。

このドラマは、3人の若い女性の同士の忌憚のない歯にもものを着せぬお喋りや父親と娘の会話のやり取り、幸子と男性の会話が生き生きと描かれている。

本論ではドラマの会話を文字化したものを例にあげて、その背後にある人間関係に焦点を当てて考えていきたい。登場人物の名前の省略は以下の通りである。

親友 奈々子：奈々，比奈子：比奈

各話に出てくる幸子の恋人の男性 1話：恋1 2話：恋2 4話：恋4

ドラマは、主人公幸子と父親との会話，妹伸子，親友2人との会話，それ

に加えて主人公幸子の会社の同僚および各話に出てくる恋人の男性4人との会話で成り立っている。

4-2 ドラマにおける人間関係の距離

日本語の特徴と言われる「はっきり言わない」「ぼかした言い方をする」「相手に察しを期待している」等の日本語の特徴は親子、親友間の会話では観察されていない。また、2-1から2-5のケースにみられる日本語特有のコミュニケーションも見られなかった。会話はかなり直接的であり、むしろはっきり言い過ぎる場面が多く見られる。

日本語は「ウチ」と「ソト」の使い分けがはっきりなされると言われている。一般に「ウチ」とは、自分の縄張りの中、または自分が所属する範囲を指し、それ以外を「ソト」としている。しかし、むしろ縄張りによる「ウチ」と「ソト」の区別よりも人間関係の親疎、つまり、人間関係が近い距離にあるか遠い距離にあるかということが言葉の使用を決定していると思われる。もちろん人間関係が一番近いものが「ウチ」だと考えられるが、その線引きは言葉に関しては曖昧である。「はっきりと言わない」「ぼかした言い方をする」などの日本語の特徴といわれるものは、密接な人間関係の場合には見られず、人間関係の距離が離れていくに従って顕著になっている。主人公の幸子自らがやっているドラマのナレーションは、対象はテレビを見ている一般の視聴者である。視聴者は人間関係の距離が最も離れていると解釈される。従って幸子は家族や親友と交わす言葉とは全く異なったレベルの丁寧体でナレーションを行っている。

4-2-1 自分や身内を褒めない

- (1) 私の家は代々続く米屋です。米屋なんですけど、米を売っているだけでなくおにぎりも作って売っています。父のこだわりのブレント米で、娘の私が言うのもなんですけど、美味しいんですよ、これが。父は、商売は下手ですが、研究熱心でお米のことを語らせたらはっきり言ってとまりません。
(第1話、出だしのナレーション)

日本人はソトに対して身内を褒めないことを述べたが(2-5), ここで主人公は父親のブレンド米を褒める場合には「娘の私が言うのもなんですが」と第三者である視聴者に対して断わりを入れている。あえて身内を褒める場合には必ず言い訳をするのが普通である。下記のナレーションは自分の会社についての説明で距離的に中間と言える。

(2) ここが私の勤める会社です。コンビニなどで売っているおつまみを開発販売している会社です。私の仕事はおつまみの研究開発。この会社は、これでも結構ヒット商品を生んでいるんです。(第1話, 同上)

次に自社が開発してセット商品を生んでいるということを述べる場合「これでも」と事前にことわりを入れて褒めに移行している。一転して主人公幸子の父親や妹または2人の親友との間での会話では普通体で、しかもかなり従来の日本語の特徴を無視した乱暴な言い方で通している。言葉は対話者との関係如何によってその使い方や調子が変わる。つまり日本語は相手との関係や場面によって使い分けの差が激しいことが観察される。

至近距離の会話1 幸子と父親

(3) 父親「何？」

幸子「いや、別に娘にみとれてた？ なかなかいい娘だなんて」

父親「馬鹿。ふざけるな」

幸子「なんで馬鹿なのよ。てれなくてもいいのにさ」

父親「あほか。せっかく男ができて嫁にでも行ってくれるかと思ってほっとしてたのにな」

幸子「何よ。寂しいくせに。いなくなったら寂しいくせに」(第1話)

至近距離の会話2 親友同士

(4) 幸子, 比奈子, 奈々子の3人の会話

比奈「遅くなりました」

幸子「遅いわよ」

奈々「いつもトロイんだから」

比子「そんなこと言ったって主婦は忙しいんですからね」

奈々「それで、どうした？」

比奈「それはですね。あれですよ」

幸子「なによ，もったいぶらないでさっさと言いなさいよ」(第1話)

4-2-2 口答え

上記の会話に見られる人間関係の距離はかなり近く，お互いに遠慮なく何でも言い合える関係である。このような関係の中では2. で述べた「いいえ」とは言うてはいけないという日本語の特徴は通用しない。「いいえ」ということが言いにくいという点(2-2参照)も，近距離関係ではその制約が完全に解除されており，口答え(2-3)についても上記の例でも見られるように，父親「馬鹿，ふざけるな」に対して幸子の「なんで馬鹿なのよ」(3)や奈々子の「いつもトロイんだから」に対する後輩の比奈子「そんなこと言ったって，主婦は忙しいんですからね」(4)などと会話の中で頻繁に行われている。

また，上司や距離間のある人物に対しては自分の言い訳をすることは口答えととられ，非常にマイナスになることを述べた。この点に関しては，会社の研究員にとっては近距離の人間関係と考えられない会社の経理の女性と研究員とではどうであろうか。経理の女性が開発にかかる経費が多すぎるということで研究員の幸子や同僚に苦情を言いに来る場面での対応がコミカルな描写で扱われている。

- (5) 経理の女性「ちょっと何なの，このシール伝票。白子が5キロにホームメイド・ゼリーが100杯って。そんなに何作っているわけ。一体，そんなに買わないと作れないの。いい加減にしてくれないと，金ばっかり使って。」
(第1話)

研究員にとっては，商品の開発にはお金がかかるという言い訳があるが，それをあえて言わずに，経理の女性が来る足音を聞きつけるやいなや全員がヘッドホンをつけて黙々と仕事をして切り抜けているのである。言い訳をせ

ずに無言でその場を凌ぐというやり方は人間関係のあまり近くない日本語コミュニケーションの方法である。この場面はシリーズを通して4回でてきており、近距離間での「口答え」とよい対照をなしている。ドラマの中ではコミカルに描かれているが、近距離間でのこの方法をとる場合は意図的に距離を置くことによって相手を疎外視する方策としてなされる場合もある。「別に」とか相手の投げかけた言葉に無言で対応するという方策である。

4-2-3 「すみません」の連発

次に、日本人は相手に気を使いすぎるのではないかという問題がある。自分の思いを率直に述べずに、常に相手が迷惑に思っているのではないかと「すみません」「ごめんなさい」を続発させる。これは、第4話の年下の恋人の浪人生の富樫君に顕著である。次は幸子と浪人生との出会いの場面で、浪人生が極度の空腹と睡眠不足で倒れたのを幸子と父親が介護して気がついた時の会話である。事情の分からない妹が加わっている。

(6) 幸子「大丈夫？」

恋4「すみません」

幸子「あやまらなくてもいいわよ、ね」 (第4話)

幸子「おいしい？」

恋4「すみません」

父親「そりゃ、何食ったって旨いよな。今はな」

恋4「あ、すみません」

妹「落ち着いた？(父親と幸子に向かって)で、そして誰なのよ、こいつは」

恋4「すみません」

幸子「うふふ」

恋4「すみません」

幸子「あやまらなくてもいいわよ、もう」

恋4「はい、すみません」 (第4話)

(7) 幸 「あ、ここ何かついてる」
恋4 「あ、すみません」 (第4話)

(8) 幸 「これが朝の分で、これが昼の分」
恋4 「どうもすみません」 (第4話)

(7)(8)では、幸子は親近感もって接しているが、浪人生の恋人は幸子に対して年上でもあるし、ある程度の距離を置いている。

幸子は親友の比奈子と奈々子に年下の恋人について話しているが「すみません」と謝ることについては礼儀正しいというプラス面の評価をしている。

(9) 幸子 「そいでね、今風でもあり、でも、かつ硬派な一面も持ち合わせているって言うか、礼儀正しいしね。うん、『あ、すみません』なんて直ぐ謝っちゃったりしてさ。かわいいの」 (第4話)

「すみません」という言葉は謙遜で控えめな印象を与えているわけで、自己の過ちを許してもらおうという本来の意味から離れ、謙遜な態度の現れとなっており、人間関係を円滑にする潤滑油とも考えられる。

4-2-4 「褒め」に関する反応

次に褒めに関しては、「うち」同士の近距離関係の中にはお互いに褒める場面は見られない。しかし、距離が離れていると解釈される恋人の男性が幸子に話しかける場面、幸子の父親が恋人の男性を褒める場面が2ケース、男性が父親を褒める場面の合計4ケースが観察される。

(10) 恋2 「何かきれいになったよね。幸ちゃん」
幸子 「いいえ、そんな」 (第2話)

(11) 父親 「確か浪人だったよな」
恋4 「はい、そうです、あの、医大目指してまして」

父親「おお，すごいね」

恋4「いや，すごくないですよ。全然だめで」 (第4話)

(12) 父親「いい米だ」

恋2「いや，まだまだです」 (第2話)

(13) 恋2「すごいですね。ご自分でブレンドなさるんですね」

父親「おうおう，まあね」 (第2話)

褒められた側の応答は「いえ，そんな」「いや，ぜんぜん駄目」「いや，まだまだです」「まあね」などの要を得ないものばかりである。褒めに対する日本語の応答詞は確立しておらず曖昧である。(14)は男性が父親を褒めるのを見た妹の伸子が横槍をいれている。伸子は父親が自分を自慢することをよしとしていない。

(14) 妹 「あもう，気を使って言っているんだったら，やめた方がいいと思います。自慢話したら止まらないんですよ」

父親「何だと」

妹 「ほんとでしよう」 (第5話)

妹の伸子は，男性が父親を褒めたことを身内として卑下し「気を使っているのだったら」と男性に対しては気遣い，父親の「何だと」という言葉には「ほんとでしよう」とストレートに対応している。

また，(14)の会話のやり取りを外から聞いていた男性は，人間関係の距離の近さを会話で感じ「なんていい家族なんだ」と呟いている。このように，日本語は会話を聞くだけで会話者同士の人間関係の距離を察することができる。

近距離人間関係では，通常お互いを褒め合うことをしないが，妹の言葉(14)の指摘のように，むしろその親近さから競って自分を自慢して売り込む(15)のような場面もある。

この会話は浪人生の恋人に向かったの幸子と父親の言葉であるが，結局は

近距離同士の関係ではお互いの自慢が許容されているのである。

- (15) 幸子「これ、私が握ったのだからおいしいよ」
父親「おれのにしな。年季が違うのさ。うまいよ」
幸子「きれいな女の人の方がいいよね。」
父親「ベテランの味だよね」 (第4話)

4-2-5 謙遜な気持ち？

日本語のもう一つの特徴として、相手に自分や自分の物を紹介したり、差し出したりする場合には決して褒めない、「つまらない物ですが」や「何もありませんが、どうぞ」のように、かえってマイナス面を出す傾向がある。相手の気持ちに負担をかけないようにという気持ちと、相手の気持ちを先取りして考えてしまうような言い方である。次は若い年下の男性が幸子に贈り物をする場面である。若い世代でも距離の離れたものに対しては伝統的なルールに従っている。

- (16) 恋4「あのう、駅の近くで、これ原宿で買ったんですけど、あ、あまりセンスよくなかったかなと思ったんですけど…」 (第4話)

4-3 距離の流動性

人間関係の距離は流動的である。時間の経過で近くなっていく場合もあれば、逆に離れていく場合もある。勿論、平行線を辿っているものもある。従ってコミュニケーション上の言葉の使い方も変化していく。最初の恋人の男性が初めて幸子を誘う場面での言葉(17)と時間がたってその距離が少し近づいてから誘う場面での言葉(18)である。

- (17) 恋1「良かったら、晩飯でもどうですか」
「ステーキのうまい店があるんですけど」
幸子「……行きます」 (第1話)

(18) 恋1 「寄ってくる？あ、いや、別に変な意味じゃなくて。いやならいいんだけど」

幸子 「ううん、私も、どんな部屋に住んでいる見てみたいんだけど」

恋1 「たいした部屋じゃないんだけどね」 (第1話)

(19) 恋1 「何か冷たいものでも飲む？」

幸子 「あ、すみません」 (第1話)

(19)では、恋人の誘いに対して、幸子の恋が少々冷めてきたその感情のゆれが表れている。また、幸子が年下の恋人と思っていた浪人生に彼のガールフレンドを紹介される場面での会話では、恋人の浪人生が幸子を指す場合と自分のガールフレンドを指す場合の言葉の使い分けが見られる。

(20) 恋4 「えっと、この人が天野幸子さん。俺の恩人。東京でのお袋みたいな人」

幸子 「……」

恋4 「あ、こいつ下園勝美です」(幸子に向って)

GF 「こいつとか言っちゃって。もう」GF=恋4のガールフレンド

恋4 「いいじゃん」(ガールフレンドに向って) (第4話)

幸子に対しては「この人」という人称詞を使い、自分の彼女には「こいつ」という使い分けをしている。それに対して、若い彼女は「こいつとか言っちゃって」と「こいつ」と呼ばれたことに対して彼が自分を近い距離にしていることを感じていることを喜んでいる心情が表れている。幸子は恋人だと思っていた男性の言葉の使い分けに自分との距離が遠く彼と若い彼女との距離が近いことを察したのである。このように日本語は、特に人称詞の使い分けが豊富であり、会話を聞くだけでお互いの人間関係が如実に分かる。恋人は幸子に対しては何を言っても「すみません」を連発する謙遜な青年であった。しかし彼女にたいしては「いいじゃん」と言っている。幸子は自分と彼女とに対する言葉の使い分けの差に距離の違いを実感している。

4-4 敬語による距離間

また、妹の伸子曰く「よく飽きもせずと同じネタで喧嘩ができるもんだ」の通り、幸子と父親の相変わらずの軽妙な口喧嘩の揚句、幸子はずいぶん腹を立てて最後には「分かりました。そうさせていただきます」と丁寧体の尊敬語を使っているし、父親も同様「はい、どうぞ」と距離を置いたよそよそしい言葉を使っている。人間関係の距離を言葉で表わした例である。

(21)は距離の移行の経緯がよく表されている。

(21) 幸子「なによ、寂しがりやのくせに」

父親「俺のどこが寂しがりやだって言うんだよ」

幸子「だってそうじゃないのよ。なによ。分かってんの。私がどれだけ考えてあげてるか」

父親「考えてる？ふざけるなよ、なあ」

幸子「例えば、私がどうして毎晩のように友達とここで集まってると思ってるわけ？そうすれば、お父さんが安心だし、寂しくないだろうと思ってそうしてあげてるんじゃないの。私だってね、もっと、こうお洒落なバーとかで飲みたいわよ」

父親「嘘つけ、嘘つけ。ここで飲むと安上がりだって、いつも言ってるんじゃないか」

幸子「なに聞いてんのよ。人の話。」^{注8}

父親「聞きたくなくても、お前たちの声が馬鹿でかいから聞こえちゃうってんだよ」

幸子「ああ、そうですか」

父親「そうですよ。お洒落なバーでもどこへでも行きやがれ。せいせいするわ」

幸子「分かりました。そうさせていただきます」

父親「はい、どうぞ」

(第3話)

4-5 察しの及ぼす誤解

親子や親友との会話では、ずけずけとものを言い、自分の感情や意思をス

ストレートに表す幸子であるが、いったん恋人とのコミュニケーションにおいては非常に婉曲で相手の言葉に気を使い、気を回し、相手の言葉にどういう意味があるのか察しを働かせる。例えば、

(22) 恋2 「でも見せたいな、幸ちゃんに。三郷村の景色。俺の田んぼ。きれいだよ。夏もいいし、秋もいいし、冬はちょっとだけ辛いけど、でもきれいだ。田んぼの向こうにさ、山が見えて、季節ごとに違うんだ。見惚れちゃうぐらいね。見せたいな。来て欲しいな」

幸子（それってプロポーズ？）

（第2話）

近距離関係ではストレートに物を言うが距離が近くない場合は、婉曲な言い方をすることを認識している幸子は恋人の言葉(22)に大いに察しを働かせている。幸子は恋人の言葉に実際にプロポーズだと察し、農家の嫁になると宣言して家を出て行くのだが、実際は深い意味はなくただ田舎を見に来て欲しかったという結末である。また第4話の恋人の場合も「会って欲しい人がいるんです」という言葉に恋人の母親に会うのだと察して出かけるが、それも思い過ごしであった。主人公の幸子は近距離間の会話では決してこのような察しを働かせる必要はない。まだ距離の近くない恋人などに関しては「察し」が重要な部分を占めるのである。

4-6 アンケート調査による人間関係の距離感

若者のドラマでは、人間関係が近い場合には、かなり直接的でストレートな会話がなされている。人間関係に距離がある場合はいわゆる日本語の特徴と言われる婉曲な言い方や「察し」が大きな位置を占めている。同じ条件のもとでも、相手が誰であるか、自分とどのような人間関係であるかによって応答の仕方の使い分けがはっきりなされるということは、現代の若者の女子大生によるアンケートの結果にも表われている。

アンケートは次ページの1. 2. 3. の応答として相手が誰であるかによって A, Bのいずれの返答を選ぶかと問うたものである。3問ともAは1.

家族， 2. 親友であり、Bは1. 大学の先生， 2. 先輩， 3. 親しくない友人とはっきりした使い分けの結果がでた。

1. 映画の券があるから行かないかと誘われた場合の断り方として，
 - A「明日は駄目。用事がある」とはっきり断る。
 - B「すみません，行きたいんですが，明日はちょっと」のようにはっきり断らないで分かってもらう。
2. 自分にはできないこと，または嫌なことを頼まれた場合の断り方として，
 - A「駄目，そんなことできない」とはっきり断る。
 - B「すみません，それは，ちょっと私にはできそうにありませんので」と相手の心情を害しないように婉曲に断る。
3. 「この部屋狭いでしょう」などと相手からマイナスの同意を求められた場合（自分は相手と同じ意見である）
 - A「そうね（そうですね）」とはっきり自分の意見を述べる。
 - B「そうでもないですよ」と曖昧な返事をする。

相手にとってマイナスの要因となるものであっても，近距離関係では自分の意見をストレートに表現するが，距離が離れていくにつれ，相手の気持ちを害しないように婉曲に曖昧な応答をしている。一般に人間関係の至近距離は家族であり親友であると考えられる。実施したアンケート調査によると日本人学生は85%が家族と親友を近距離関係とし，あまり親しくない友人，先輩，先生と順をおって距離が離れていくようである。留学生は70%が家族を近距離と置いており，親友を含んだものを至近距離とした留学生は30%である。アンケートは日本人学生61名と留学生14名で留学生は中国人12名，韓国人2名である。相手による応答の区別はくっきりなされており，決してBのグループがAに入ってくることはない。ただ，あまり親しくない友人は先輩，大学の先生間で距離的に流動性があるようだ。

5. ま と め

一般に日本語でのコミュニケーションは「螺旋的である」とか「ぼかした言い方をする」と言われているが、日本人は人間関係によって言葉の使い分けを自在に行っているのである。人間関係が親密で距離が近い者に対してはほとんど気を使うことなくストレートに気持ちを表現する。それは既に長く良好な確固とした人間関係が築き上げられているからである。しかし一旦距離の遠い関係の者に対しては日本語の特徴と言われる「はっきり言わずに、ぼかした言い方をして、相手にそれとなく察してもらう」やり方をする。言葉の持つ本来の意味よりもそれを越えた次元で人間関係の持続を先行させようとするからである。つまり、相手の気持ちを尊重しようとする意図なのであるが、これは外国人には理解しにくい点である。言葉以外で判断しなければならぬことが多すぎるからである。言葉はコミュニケーションの手段であり、真意はまず言葉を通して語られるのが普通である。しかし、全て言葉の語義通りに受け取ってしまうと本心はそうではなかったということで、誤解を生じたりもする。日本人は言うことと真意が違う、二重人格なのかという極端な結論さえ導き出されることになる。

日本語では言葉の語義の背後に相手との人間関係が大いに影響しており、この関係の如何により言葉の使い分けがなされている。このことを上級レベルの日本語学習者は理解し、自分が築いている人間関係を確認して言語行動を行う必要がある。2で取り上げた個々の事例はテレビドラマの会話の中で具体的に示されている。上級レベルの日本語学習者が人間関係を円滑にし、日本の社会に入っていくためには、少しでも多くの事例に遭遇し、学んでいくことであるが、ドラマの中での疑似体験で学習することもできる。テレビドラマは人間関係を背後にした言葉の使い分けや年代による言葉の使い方など日常生活に最も近いところで作成されているからである。ドラマの中には学習用の素材が多くある。その中から個々の問題を取り上げて検討し、疑問を解決していくことは学習者にとっては分かりやすい方法である。そのためには、お互いが抱えている問題を提供し合い、自由に討議できるような教室活動の設定が望まれる。

注

- 1 福岡女学院大学在学中の外国人留学生14名(中国人12名, 韓国人2名)のインタビューによる
- 2 八代京子他 1998「異文化トレーニング」三修社 p.234
- 3 呉善花「日韓・本音の交流を：異なる『善』を見つめて相互理解へ」
『言いたい聞きたい』朝日新聞 1992年7月2日
- 4 八代京子他 1998「異文化トレーニング」三修社 p.78
- 5 直塚玲子 1980「欧米人が沈黙するとき」大修館 p.131
A夫人「お宅のお嬢さん、ピアノの練習をお始めになりましたのね。羨ましいですわ。才能がおありなんですもの。将来がお楽しみですこと。ピアニストにおなりになんてございましょう。とても感心しておりますのよ。毎日、何時間も何時間も夜遅くまで、それはご熱心に練習していらっしゃいますもの。」
B夫人「まあ、とんでもございませぬ。まだ始めたばかりでございますのよ。将来のことなど、まだ何もわかりませぬわ。そんなに聞こえているなんて、ちょっとも存じませぬでしたわ。お耳障りでございましたでしょう。どうも申しわけございませぬ」
- 6 八代京子他 同上 p.82
- 7 金田一春彦 2001「ホンモノの日本語を話していますか？」角川書店 p.57
2『日本語に表れる日本人の性質』の中で日本語の特徴をあげている。
- 8 いつも幸子の父親が娘の恋人のことを心配して隣の部屋で聞き耳を立てて、幸子たちのおしゃべりを盗み聞きしているのを幸子たちは知っている。

参考文献

1. 直塚玲子 1980「欧米人が沈黙するとき」大修館
2. 八代京子他 1998「異文化トレーニング」三修社
3. 異文化間教育 2001 15「異文化トランス」異文化間教育学会
4. 異文化間教育 2001 16「異文化受容の転機」異文化間教育学会